

「おれと斯ういふ交情になつたのが口惜くつてかい。」

「あら、そんな厭味を仰有るもんぢやありませんわ。」

と、涙をぬぐつて、嬌として微笑した。

「ぢや、何故さ？」

「蝶が死んでるの、雨に打たれて。」

「どれ〜。」

「ほらね、あすこに、見えませう。」

と、美津助は、重い花が自然としほれるやうに、物静かに首を傾けて、白い指をさして見せた。

美津助の、肩から腕に流れてゐる柔かい、しなやかな線が、だん〜平太郎に響はつて来る、平太郎の全身が自然と美津助により添うて行く。

「見えませう、可哀想ぢやありませんか。」

と、美津助は顧みて嬌笑した。

一羽の白い蝶が、それは〜小さい蝶が、きれ〜になつた羽を打たれて、敢なくも地に落ちて死んでゐる。暮れゆく秋の色を求めて、何時まで生きてゐたのであらう、小春日の静けさに、返り花をたずねて生れた蝶かも知れない。小春の日光は春のやうではなかつた、朝夕はすぐ冷たい風が吹いた、春に生くべき蝶は、秋の寒さが堪えられなくつて死んだ。蝶は可哀想など、美津助はしみじみ思つた。

「可哀だわね。」

と、重ねて言つた、平太郎は黙つて雨の音を聞いてゐた。

二

美津助はちつと蝶を見てゐた、白い肌が銀いろに光つて来る、しなやかに肩が流れて、縮緬の着物が身體に重くくづれて掛つてゐる。

「わたしの姉さんが、丁度此の蝶のやうだつたのね。」

それを思ひ出して泣いたのだなと思うと、平太郎もいじらしかつた、自分も關係がない譯ではない、美津助が攻められても蹴られても踏まれても、ちつとこらへて乙女の特操を守つてゐたのは、姉の果敢ない運命を痛ましいと思ふと同時に、自分は左様はすまいといふ心があつたからだ。然るに、その乙女の純潔な、雪よりも白い心と身を、わがために捧げて厭はないのだ、いとしき女よと、平太郎はちつと瞠つて、

「心配するな、お前にはそんな蝶のやうな運命に逢はせることちや無い。」

「あたし、あなたを信じてゐるわ。」

と、美津助は力ある聲で言つた。

「さうだ、何にも言ふことはない、黙つておれを信じておればいいんだ。」

誰が何といつても構はない、美津助を落籍して家へ入れなくつちやなら無いと思

つた、自分を信じて、心も身もゆるした女を、たとへ一日でも一時間でも他の家に置く譯には行かなかつた。十分でも二十分でも、他のお客の酒の相手なんぞさせては置けなかつた、そして、猛然として立つた。

「あら、如何なさるの。」

「おれは、もう恙うしちやゐられ無い、家へ歸る。」

「何故、何か御氣に召さないことがあつて、それなら左様仰有つて下さいな、そ、そんな、唐突に歸るなんて言はれちや、あたし心細くなつて仕方がないわ。」
と、そつと眼をぬぐつた。

「何だ、餘計な氣苦勞をするな、一時もちつとしてはゐられないんだ、一時も早くお前を落籍さなくつちや、おれの氣が濟まない、おれも、あの田村種長とやらが姉さんを欺したと同じやうな心持でゐると思はれるのは残念だ。」

「そんなことを、あたしちつとも考へちやゐなくつてよ。」

「何でもいい、おれに任せてをけ。」

「どうせ、初つからあなたに任せた身體なんですけれども。」

世の中は左様儘になるものぢやないと、言はうとしたが黙つて終つた、それから間もなく平太郎と美津助は、つれ立つて、紅葉亭を出たのである。

雨の降る中を相合傘で、むつまじさうに片袖づゝ濡らしながら、電車通りへ出ると、向ふから来た二人づれの男、平太郎を見ると、丁寧に小腰を屈めて挨拶した。

「ウム、千代松か、何所へ行く。」

と、苦笑ひしながら言つて、傘のうちの美津助を顧みた。千代松といった平太郎の言葉に、美津助はハツとして男の顔を見たが、やがて口惜しさうに齒を噛みしはつて、ほろほろと涙をこぼした。

「おい、どうしたのだ。」

と、平太郎は立ち停つて不審さうに聞いた、二人づれの男はもう五六歩先へ遠ざ

かつてゐた、美津助があはてた風に涙をぬぐつた時に、先の二人づれは振りかへつて此方を見てゐた。

「どうしたのだい、一體、腹でも痛いのかい。」

「いゝえ。」

と、美津助は首を振つた。

三

紅葉亭へ逆戻りをして、奥の小座敷で炬燵しながら、むかひ合つてしめやかに話を始めた。

中旗千代松は平太郎とは遠縁の親類になつてゐる、今年の夏大學を卒業したので、平太郎の妹の雪子と、近々に結婚する運になつてゐるが、雪子が病氣なので延々になつてゐたのである。

その中旗が、美津助の姉の仲子と種長の仲を割いて、仲子に悲しい最期をさせたといふことを、平太郎は少しも知らなかつたし、中旗と平太郎がそんな関係があるとは、美津助も些とも知らなかつたのである。

先刻、中旗と一所に來たのは、種長であるが、今はもう仲子のことなどはすっかり忘れて、これも、近々に白井男爵の令嬢と結婚する都合になつてゐる。中旗の紹介で、平太郎はしばらく種長に逢つてゐたが、その種長が、仲子に無情な最後を遂げさせた男だといふことは知らないで過した。

美津助は、姉の委しい遺書の中から、二人の男の薄情な仕打を知つてゐたから、是迄だつて何れ程怨んでゐたか解らなかつたのである。

「因縁といふものは解らないものだ。」

美津助が涙ながらに話して終ふと、平太郎はしみじみ感じたらしく言つた、實際人の世の縁の縁は、何所を如何引いてゐるか人間の力では分らない。

「お光。」

と、平太郎は男らしく呼んだ。

「え。」

と顔をあげた、美津助はお光といはれたのが嬉しい。

「心配するな、姉さんの敵はおれが取つてやるぞ。」

「敵を取るつて……?」

「まさか、首を取る譯でもないがね、そんな薄情な思遣りのない男に、おれの妹はくれて遣れない。」

「でも……お嬢様は……。」

「大丈夫、雪が何をいふものか、おれは初つから千代松を好てはゐなかつたんだから、こりやいい口實になるのさ。」

「はい。」

「白井男爵といふのはおれの叔父さんだ、種長の方だつて、まつとぶちこわして見せるから……。」

「そんな事を爲つて……。」

「案じるなよ、己に出づるものは己にかへるのさ、さんく世の中の女を馬鹿にした報ひだ、はくく。」

と、平太郎は心持よく笑つて、

「然し、おれとお前は、決してそんなことは無いんだよ、え、心配しなさんな。」

と、首肯いた。

暖かい炬燵、顔がほてる、外には冷たい秋の雨が、枯木の梢に寂しく降りそよいでゐたが、室内はほのくと暖かつた。

何所やらから三昧の音が、しつとりと雨にからんで響いて来る、二人は顔を見合

せて笑ひながら、

「唄」念が届いて斯うなるからにや、春の氷のうすきはいやと、寝みだれ髪のはづかしく……」

黙つて耳を傾けてゐたが、平太郎が、

「どけた素顔の……しつぱりと夜の雪、つもりく深くなり、人めしのびし冬ごもり……かね。」

と、小聲で唄つた。

老 男 爵

芝高輪の高柳平太郎が邸へ黒塗の馬車が着いた。

三太夫、女中、書生等が、米肴はつたのやうに平伏して出迎へると、自働車を降りたのは五十七八の老紳士で、鼻下の胡麻鹽鬚に犯すべからざる威厳を見せ、眼光の鋭い、誰でも陰へ廻ると雷様と申上げる位、それ程に恐ろしい方である。

平太郎には叔父、先代子爵夫人の實の兄で、自井男爵其の人である、苦虫を噛みつぶしたやうな顔をして玄關へ突立つて、出迎へた者をぐつとにらみ廻す、これが此の殿様の癖である。

「入来しやいまし。」

と、聲を揃へて平伏する。

「ウム、平太郎はゐるか。」

「御前さまはちよつと御出かけ遊ばしましてございます。」

「何所へ行つた。」

「それがその、は。」

と、三太夫は禿げかゝつた額をつるりと撫で、恐縮さうな様子を見せる。

「主人の出先を知らんといふやうな氣の付かんことでは不可な。」

「は、御尤も様で。」

「何がもつともだ、其の様だから生涯出世は出来ん。」

と、来る匆匆怒鳴りつけながら奥へ通るのである。三太夫も女中も、書生も、めい／＼自分たちの部屋へ引下る。

奥では平太郎の妹の雪子と、母親の辰子が何か話をしてゐたが、男爵の入つて來

たのを見ると、吃驚して話をやめた、雪子は立つて座蒲團を勧めた。
「内談かな。」

と、ちろりと二人をにらめながら座つて、

「平太郎にも困つたものぢや、眞晝間藝者遊びだといふぢや無いか。」

「いえ、そんな事はございません、信州の方へ獵に行きましたのですよ。」

と、辰子が辯解がましく言ふ。

「は、は、は、上野の森に魔性の猫を狩に出かけたさうぢや。」

と、皮肉に言つてちろりと見る。

小間使が紅茶をもつて来た、三人の前へそれぐ置くのを疑と見てゐたが、行つて仕舞ふのを待ちかねたやうに、

「今日はその事に就て相談があつて參つたのぢや。」

「は、は。」

と、辰子は温順しい。

「あれも決つたものを持たせないから放蕩をする、よい縁があるのだが、如何ぢやな。」

「よい縁と申しますと、何方の娘さんで御座いませう。」

と、辰子は膝をのり出す、雪子も熱心に耳を傾ける。

「青井伯爵の令嬢ぢや、たしか雪も存じて居らうと思ふ、學習院の才媛とか云ふたそうぢや。」

「青井さんなら、よく存じてますわ、久子さんと仰有つて、あたしたちより一級上に居りましたの。」

と、雪子が言つた。

「どうぢや貴ふ氣はないか、先日伯爵に逢ふたら、是非にといふ話でな、おれも好縁ぢやと思ふから、平太郎さへ何なら、異存はないと答へてをいた。」

「はい、平太郎が何と申しますか。」

「平太郎が何と申さうとも、叔父たるわしが目がねに叶うた嫁ぢや、貰へ貰へ。」

と、白井男爵は性急だ、年を老ると先が短くなるから物いそぎをする、辰子は雪子と顔を見合せた儘、急には返事をしなかつた。

二

「どうだな、雪子も知つてるといへば尙更ぢや。」

と、男爵は促す。

「私の嫁ではございません、平太郎の女房でございますから、平太郎が歸りましたら、相談してをきます。」

「いけない、お前は左様いふ手ぬるいことを言つてゐるから不可、だから平太郎が放蕩をするのぢや。」

「若いものには有りがち、その内には止ませう。」

「左様いふ氣樂なことを言ふ。」

「老いては子に従へと申します、その御話も平太郎の心任せですわ、平太郎がいくら馬鹿でも、高柳の家名を汚すやうなことは致しますまい。」

「藝者遊びなどして、それが家名にさわりはないと云ふか。」

「まさか、そんなことも無いと存じます。」

「フム。だがその藝者を落籍して家へ入れるとか何とか言つてゐるさうだが、これは如何だ。」

「相手の女の氣性を見て、差支なかつたらゆるしてやります。」

「辰ッ。」

と、男爵は怒鳴つた。

「それは本氣でいつてるのか。」

「勿論でございます、良家の娘さんが決つてよくつて、藝者がみんな悪いものとは言へませんから。」

「呆れた……だが、青井伯爵の方は如何する。」

「ですから、平太郎が歸りましたら相談して見て御返事いたします。」

「心がけのいい母親だ。さういふのがよく子供にみじめを見せられる。」

「構ひません、自分の子と一所なら乞食をしてもようござんす。」

「フーム。」

「俵のすきな妓ならば、ならば夫婦にしてやりたいと思ひます、雪も知つてる女ださうでございませう。」

「エライ惚れ様ぢや。」

と、ちつと腕を組んで考へてゐたが、

「よし、お前たちが左様いふつもりなら、わしも敢て異存は申さん、だがその

妓の性根を如何して試すかな。」

「試さなくつても、平太郎が信じてゐる女でしたら、わたしたちも信じて差支ないと思ひます。」

「それも一應聞えた話だが、念には念を入ろといふこともある、これはわしに任せなさい、決して悪いやうにはせん。」

「はい。」

「その上で、此の女ならばといふ所が見えたら、わしの娘分にして平太郎にくれてやるが、如何ぢや。」

「結構でございます。」

「もし、わしの臍に落ちん行爲のある女ならば、その時は、わしは飽く迄反對するが、これは如何だ。」

「よろしうございます。」

「それぢや、わしに任せなさい、しかし平太郎には内秘だ。」

と言つてる所へ、噂をすれば影がさして、平太郎が歸つて來た、三人はちよつと白けた顔を見合せた。

「此の頃獵には出かけないかな。」

と、白井男爵は何げない體で言つた。

「はあ、些つと調べ物がありますので。」

「フ、結構ぢや、とかく調べ物でもある位忙がしくなくてはならん、小人閑居して不善をなすといふ。」

「はあ。」

と、擦ぐつたいやうな顔、テレ隠しに袂を探つて巻煙草を出して火を點ける、紫の煙がふわくと舞ひ上る。

三

「調べ物は何かい。」

「ええと、そのやはり獵に關することなのです、雑誌に獵のことを書いてくれと頼まれましたので。」

と、頗る苦しい。

「何かい、上野の圖書館へ行くかい。」

「へエ。」

と、變な顔、少し頬をあかくして母と妹を見くらべる。

「まあいい、若いうちは何でも勉強した方がいい、所で雪の縁談だかな、近々のうちに取り決めたいといふ先方の申出なのだが、此方の都合は如何ぢやな。」

「それはお断りします。」

と、平太郎は確固した落ちついた聲で言つた、叔父も、母親も、吃驚して目を丸くした。

「何を言ふのだ、平太郎。」

「一旦は承知しましたが、雪を中旗へ嫁ることは、改めて御断りします、兄として破約します。」

「お前は何をいふのです。」

と、老いては子に従ふと言つた辰子も、平太郎の此の言葉にはちよつと従ひかねたと見える。

「私の方から参上しやうと思つてましたが、叔父さんの御入來を幸ひ、改めて此の場で破約を申し込みます。」

と、きつぱり言つた、雪子は黙つて微笑して居る。内々承知してゐるのかも知れない。辰子は急ぎ込んで、

「何、何故です。」

「どういふ譯だ、はつきり言へ。」

と、男爵も怒鳴つた。

「中旗のやうな薄情な、思ひ遣りのない、冷酷な、そしておまけに多情な、あまいとからい男には、私の妹はくれられません。」

「證據があるか。」

「御目にかきませう。」

と、清しく笑ひながら、平太郎は懐中から二通の手紙を取り出した、仲子から美津助の光子へ送つたのと、母親へ宛てたのと、その二通の遺書、美津助から借りて來たのだ。

「見せる。」

男爵は引つたくるやうにして受けとつたが、見てゐるうちに段々顔の色が蒼くな

つたり赤くなつたりする、中旗や種長に對する怨みが綿々として縷々として書き連ねてある。

「不埒な奴だ。」

と、男爵は大きくで怒鳴つた、辰子も受けとつて見たが、これはまた仲子の境遇が痛ましかつたか、目に露を光らせて讀んで居る。

「可哀想にね、この仲子つて云ふ娘が、お前たちが鎌倉で助けたとか云ふんだね。」
と、辰子はそつと涙を拭つた。

「不埒な奴だ、二人とも實に不都合千萬だ、種長も薄情なら、そんな男を娘の聲に世話しやうといふ千代松も不埒ぢや。」

根が潔癖、曲つた、人情に外れたことが嫌ひなだけに、人の悪を憎むことは蛇蝎よりも甚だしい白井男爵は、中旗と種長の冷酷な仕打ちに烈火の如く怒つたのである。

「これはわしが貰つて行く。」

と、男爵はその手紙を取りあげた。

「どうするんです。」

「破約の證據に二人の面へ叩きつけてやるんぢや、平太郎の悪口をさんぐ讒訴した、あの似非賢人の面の皮をひんむいてやる。」

と、おい／＼怒つて居る。

「私の悪口を？」

と、平太郎は顔をあげた。

四

「何、何でもないので。」

と、老男爵は少し周章で、辰子や雪子を見た、大概の様子は分つてゐるので、平

太郎は何にも言はなかつた。

時に、襖の蔭に小間使が淑やかに手をついて、來客がある旨を告げた、客は中旗と種長である。

「此所へ通せ。」

と、老男爵は餘憤去りやらぬ體で言つた、辰子は危なげに、

「彼室で別にお目にかゝつたら如何？」

「何、構はん、呼びつけてどやし付けてやらうと思つてゐた所だ、此所へ引ばつて來い。」

間もなく、中旗と種長は何にも知らないで入つて來た、高柳故子爵未亡人も、白井男爵も、みんな揃つてゐたので、ちよつと恐縮して、末座に手をついた。

「こら、貴様たちは何しに來た。」

と、男爵は頭から怒鳴つた。

「此邊を通りかゝりましたものですから。」

「御機嫌うかゞひか、女の所へノコゝ來るやうな意氣地のない奴はおれは大きらひだ、さつさと歸れ。」

「はい。」

と、中旗はおづ／＼してゐる、種長は何が何やら譯が分らず、目ばかりパチタリさせてゐる。

「目ざわりだ、歸れ、歸らぬか。」

「はい。」

と、尻を浮かす。

「それから改めて言つて聞かす、千代、雪はお前の嫁にはやれ無いから、その心組でをれ。」

「えッ？」

「それからも一つ、わしの方の話ぢやが、これも少し考へがあるから、田村種長君と娘の縁談も、まづ沙汰やめぢや。」

「叔父さん、何故です、唐突に。」

と、中旗は目の色を變へて言つた、種長も青くなつて胸をドキつかせた。

「何故も糞もあるか、おれは貴様たちのやうな、冷酷な、薄情な、思ひやりのない、血も涙もない男は大きらいぢや。」

「何ですつて。」

「黙れ、口返答をするか。」

「ですが。それや餘りです、私は親類ですからとにかく、種長君は他人です、餘り失敬です。」

「フフンだ、小ざかしいこと言ふな、學問ばかり出来たつて、血も涙もないものは秀才でも何でもないぞ。」

「叔父さん。」

と、中旗は血相變へて詰めよつた。

「まだブツ／＼言つてるかッ、見る、この手紙を。」

と、二人の前へ叩きつけて、

「絶縁のしるしにそれを呉れてやる、とつとと歸れ。」

と、大聲に怒鳴つた。

怪しみながら手にとると、種長は中を讀まないうちに、一目見ると、それは心に覚えのある小川仲子の手跡だ、はつとして眞青になつた。

「さあ讀んで見る、大きな聲でそれを讀んで見る、馬鹿ッ。」

と、男爵は大層な勢、平太郎と雪子は笑ひながら見てゐた、辰子は眉を潜めて、ちつと種長と中旗の様子に目を注いでゐた。

種長の顔色は土のやうになつた。

其の面影

二三日平太郎が見えなかつたのが、もう心細くつて堪らなかつた、起きたばかりの寝みだれ髪をかきあげて、わが影をうつす鏡の面も曇る、心も曇る、思ひ寝の夢さめて果敢ない朝が続いた。

「噢……逢はぬ其の日は氣にかゝり、逢へば口舌の種となる、にくらしい程、かはゆうて、わしが心はエ、何ぢやうら……」

こんな唄も、つと口を衝いて出る。

友達に誘はれたので餘儀なく獵に出かける、五日ばかりで歸る、獵物を肴にゆつくり話さうと思ふと——いふ手紙が來てから、もう四日ばかり経つた、明日か明後

日はもう歸るだらうと分りきつたことを指折り數へて、やがてわれと自から鏡の面のわが顔を見入つて微笑むのである。その時階下から、

「花に逢ふ、松に枝がらむ蔦かつら、露の尾花にひかされて、戀には細る女郎花」
はがらかな聲の間に、三絃の音が交つて聞える。美津助は凝と耳を傾けてゐた。

誰かトさらつてゐるのだと、恍惚と聞いてゐると、トントんと階段を上る音、下地妓が背後から、

「美津助姐さん、お客様よ。」

「えッ？」

と、振りかへると、さりとては氣早な、下地妓の後には、六十ばかりの白髪の老人、黒木綿五紋付の羽織、小倉の袴をつけたのが、あちこち見廻しながら入つた。

「まあ、唐突に御案内して吃驚するぢやありませんか。」

と、言ひながら、手早く四邊を片付けたが、誰とも、何用とも分らぬ儘、不審の

眼を瞻りながら、

「さあ、何卒御敷き下さいまし。」

「はい、はい。」

と、そこへ坐つて、

「初めて御意を得ます、拙者は高柳家の家扶で三太夫と申すもので御座る、御見
りをかけて、以來御別懇を願ひあげまする、はい。」

「いえ、私こそ。」

とばかり、お光は面喰つて頭をさげた。

「あなた、お光さんと仰せられますかな。」

「は、はい、左様で御座います、御前様にはいろ／＼と御世話になります。」

「さてはや、美しくうゐらせられます、若殿様が御迷ひ遊ばされるのも無理はど
りませぬて。」

「はい。」

と、挨拶に困つて美くしい顔をしかめる。

「然し、さてよ、外面女菩薩、内心如夜刀、ああ鶴龜々々。」

「何を仰有るので御座います。」

「はい、これはしたり、餘りあなたが美くしいので、トント用事を忘れてゐました、
さてお光どの。」

「はい。」

「厭なことを申さねばなりません、手前今日参上いたしましたは……」

と、つるりと禿げかゝつた額を撫でて、

「さてはや申し惜い儀でござる、さて其の、其の、はあて、何と申したらよろしう
御座らうかな。」

「御冗談仰有らずに、御用を仰有つて下さいまし。」

「冗談？ いや真剣でござる、真剣で御座る、真剣では御座るが、それが其の甚だ申し惜い儀で御座りましてな。」

「……………」

「ええと、其の、何でござるわ、美津助どのを男と見かけて御願ひしたいことが御座ります、いや女、女と見かけて、はて、これは如何も……………」

二

美津助は無言で其の様子を眺めてゐたが、胸は頻りと打ち騒ぐ、もしも切れるといふのでは無いかと思うと、心の亂れ、髪の亂れ、身體はかたくなるのである。

「さて、美津助どの。」

「はい。」

「甚だ言ひ惜い儀ぢやが、思ひ切つて申上げるで御座らう、手前はたゞ使の儀で御

座れば、手前を御惜しみのないやう願ひまする。」

「はい。」

「何か御手前は御前様と御約束があるよしに承はつたが、ええと、さて御前様も、此度その、ええと、その青井伯爵……………いや何、これ迄のことは無い縁と思つて、手を切つては下さらぬか。」

「えッ？」

心に斯う覺悟はしてゐたが、面とむかつて言ひ出されると、餘りいい氣持はしない、美津助の顔色は變つた。

「さ、さ、怒ては下さるな、いろ／＼と邸にも事情があつてな、誠に餘儀ないことだが、無い縁と諦らめて貰いたい、と、言つた所で、何、その、手を切つて貰ふには相當の手當はする心組ぢや。」

「……………」

「まづあんたが生涯困るやうなことはしない、それも此方からどうとは言はぬ、あんたが望だけ差しあげやう。」

聲は立てなかつたが、美しくい美津助の眉がビリ／＼と動いた。

「どうちやな、承知しては呉れまいかな。」

「御前様は御歸りになつたのですか。」

「殿、殿様は、……その……御歸りになりました。」

「さうですか、御前様はあの、御存知で被在やるので御座いますか。」

「そ、それは其の、其の、勿論御存知で被在やる、が、左様なことは如何でもよろしう御座る、あんたが此の手切話を承知してくれるか、其の御返事だけ聞けばよいので……」

「御返事は、御前様に御目にかつて申上げませう。」

「それが、その、御前様は、ちと都合が悪いのでな。」

「いえ、お目にかつたからつて、決して御無理は申しません。」

と、心を静めて、然し顔の色は凄く變つてゐた、齒を喰ひしはつて、

その上で、とつくり御話をきかして、綺麗にお別れいたします、切れろといふのを無理に御纏り申してゐやうと云ふのでは御座いません。」

「そ、そ、それが不可いのでござすがな。」

「何故でございますか。」

「御前様も御承知の上で、そ、その、わしが使者に立つた譯なのだから、それは無駄で御座る。」

「とにかく、一度逢はせて下さいまし、本當に、わたくし、誓つて偽は申し上げません、きつとお別れいたします、はい、切れろと云ふのを、無理にお纏り申すやうな女ではございません。」

「それが、その都合が悪うがしてな。」

「どうしても逢はしては下さらないんで御座いますか。」

と、云つた美津助の眸は血走つてゐた、何事も胸に秘めて、使者の三太夫に物を言つても仕方があるまいと思ふので、恨み惱みをちつと押し包んでゐるだけ、それだけ心は苦しかった。

「その所は御察しを願ひたいものぢや、それから、ええと、これはその御前様から下さる。」

と言ひながら、懐から服紗包を取り出した。

三

それを見てゐるうちに、美津助の顔に殺氣が立つて来る。ちつとこらへてゐたが、手切金の心組だな——と思うと、胸へむか／＼と込み上げて来た。

「珍ないが、現金で一萬圓、取つてをいて下され。」

「いりませんよ。」

と、美津助は投げ出すやうに言つた。

「な、なせな。」

「ほ／＼、憚りながら斯う見えたつてお金が欲くつて肌身を任せたんぢやありません、ほんとに御前様を御いとしく思つたればこそ。」

と、涙をぬぐつて、

「ですから、切れろなら切れます、別れろなら別れます、私と關係を續けてゐるのが、御前様のおために悪いなら、そりやすい分お別れいたしますけれども、お顔も見せないで、四五日旅へ行くと仰有つたなり、使者で別れ話は御前様にも似合はない御仕打だと存じます……こんなことを、使者のあなたに申上げてでも仕方はありませんけれども、錢金づくでいつしよに成つた情交では御座いせんから、錢金づくでは御別れは出来ません、どうぞ左様仰有つて下さいまし。」

「フン、フン、だがこれは折角御前様の御思召しぢや、受取つてをきなされ、左様でない、わしも困ります。」

「私も困ります、斯ういふお金をいたしましたら、あれ見ろ美津助は、お金が欲しさに高柳の御前様に身を任せたと、人の噂さが恐ろしく存じます、自分の心に濟みません、いえ、いつそ御前様がそんな女だと思召してらつしやるのかと思うと、わたしは口惜しう存じます。」

「フム、な、なる程。」

と、三太夫は首づく。

「わたしの心を御存じのない方でも御座んすまい、これはどうぞ御持ちかへりを御願ひいたします。」

「だが、然し、折角持つて来たのぢや。」

「いたらく譯がございません。」

「したが、御前様と手を切つたら、いろ／＼困ることが御座らう、ま、何にも言はずに收めて置きなさい。」

「困つたつて構はないぢやありませんか、どうせ棄てやうとする女ですもの。」

「ウン、そ、それは。」

と、三太夫は目を白黒させる。

「どうぞ、御持ちかへりを願ひます。」

美津助の聲は落ちついて静かであつたが、その胸は高く動揺してゐた、眸の底にも、顔にも、形容の出来ない凄い色が見えた。

「どうしても御受とりは下さらんかな。」

「一體、手切金などといふやうなものを、わたしの所へ持つて来るのが間違つてゐるのです、切れると仰有るならピタ一文戴かなくつても御別れします、もと／＼お金が欲しくつて肌身をお任せ申したのではございません、わたしは藝者、御前様は

「お客、お飽きになつたらお出でにならない迄、まさか私も、約束だからといつて御邸へ押しかけても行きません、御前様の御名前にかゝるやうなことは致しませんから、どうぞ安心して御歸り下さいまし。」

「ちや、別れて下さるかの、子爵のことは思ひ切つて下さるかの。」

「なる程お別れはいたしませう、けれども思ひ切らうと思ひ切るまいと、それは私の心で私の勝手、他さまに何の關係がありません、思ひ切れとて思ひ切れるものではありません、思ひ切る位なら、初からこんな情交にはなりません。」

と、美津助は言つた。

目には涙の露時雨、はらくと袖を濡らした。三太夫はそつと横をむいた。

四

それから二三日経つた。獵に出かける時に手紙を寄越したぎり、平太郎からは何

の消息もなかつた、とは言ふものの、美津助は心の底では、尙ほ平太郎を信じて居た。

主人が旅に出た留守を、家のものや、お家の忠臣たる三太夫なぞの計らいで、手を切らせて終はふとする、よくある事だとも考へられる。さうだ、それに異なるまい、とにかく歸つた上での相談と、心のほぞは決つて居たのである。

すると、ある日、朋輩藝者が何所かへ出かけた留守、女將が茶の室で、ちよいと用があると云つて呼んだ。

「ちよいと、お前さん、京坂と云ふお客様があるの？」

「ええ。」

と、點頭いた。

十日ばかり前から自分を呼んでくれる、鼻下に半白の鬚のいかめしい五十七八の老紳士、厭味のないお客である。ただ酒を飲んで、淡白遊んで歸る。

「大變な金持なんだつてね、それで華族だつてえちや無いか、一體どんな關係になつてるの。」

「どんなつて、唯お酒のお酌をするだけ、それつきりぢやありませんか。」

まだ自分の心が分らないのかと、美津助は微笑した、あの晩以來、餘りひどい折檻はしない、もつとも、平太郎といふ華族の旦那がいたので、金も自由になつたので女將の機嫌は悪くは無かつた。

「左様かね。」

と、笑つて、

「お前さん、高柳の御前と別れたんだつてね。」

「えッ？」

と、吃驚したが、何げなく、

「そんな事はありませんわ。」

「さうかね、そんな話を聞いたけどもね、此の頃、ちつとも御見えにならないぢや無いか。」

「水戸の方へ獵に行つてますから。」

と、さりげなく答へた。

「さう。」

と、女將はそれつきり黙つて仕舞つた。

「御用は？」

「さうね、別に用つて譯ぢや無かつたんだけど、あんまり閑だからお茶でも淹れやうと思つたのさ。」

と、言ひながら、女將は自から茶を淹れて甘納豆などを出した、美津助は何だか變な、擦ぐつたいやうな、あとが恐いやうな感じがしてゐた。

然し、別段氣味の悪いやうなことを言ひ出さないうちに日が暮れた。遊びに行つ

てゐた妓達も歸つて来る。それ／＼お座敷がある。切火を打つて出かける。さうかうしてゐる内に美津助へも口が掛つて来た。それは今日噂をした京坂といふお客で、冬の夜の川風、月に啼く千鳥を聞くも一興、枕橋の八百松にゐるから是非都合して来いと云ふのであつた。

「ちよいとオツたわね、行つといでな。」

と、女將は勧めた、何となく氣が進まなかつたが、いつも淡泊したお客なので、仕度をして出かけたのは、もうまつたく日が暮れて、冷たい月影が枯木の梢に寒さうに光る頃であつた。

五

土地の藝者と一座して、唄つたり踊つたり、八百松の座敷は賑やかに夜が更けて行つた。京坂の命令で、萬の家の女將も呼んで、冬枯の隅田堤に、陽氣な唄を響か

せた。

女將は片肌ぬぎになつて、踊り狂つて大浴に浮れた。京坂もむづかしい顔をしてひくづして騒いだ。時間がくると土地の藝者も御免蒙つて引き下つた。

「女將も美津助も、わしが自動車で送つてやらう。」

と、老紳士は言つた。

三人並んで玄關へ出ると、老紳士の自動車は待つてゐた。女將も京坂も乗つた、續いて美津助も乗つた。やがて、もう全然人通りの途絶えた夜の町を、自動車は轟然たる唸り聲を出しながら疾走して行く。

三十分ばかり経つと、自動車は停つた、京坂は女將の顔を見てニヤリと破顔つた、女將は黙つて目で笑つた。

「さあ、光らやん来たよ、降りませう。」

「おや、もう来たのですか、随分早うござんしたわね。」

と、何げなく降りて、四方を見廻すと、どうも勝手が異つてゐる。月は西の方に沈まうとして寂しく傾いてゐる。冷たい風が古城のやうな大きな建物を吹いて、さらくと植込の木立が鳴る。

「どうしたのでせう。」

と、言つた美津助の聲はふるえてゐた。安からぬ胸を轟かしながら、目の前の建物を見上げ、更に京坂と女將をかはる／＼見較べるのであつた。

「どうもしないよ、お前の家へ歸つたのちや無いかね。」

と、女將は言つた。

「私の家？」

「左様だよ、京坂の旦那が落籍して下すつたからにや、京坂さんの御宅は、つまりお前の家だらうぢやないか。」

と、女將は冷笑ふやうに云つた。

「えッ、何ですつて？」

と、美津助は我にもあらず叫んだ。その瞬間、今日女將が京坂の噂をしたことや、京坂がわざわざ女將を八百松に寄んだことなどを思ひ合せると、さては前々から計つたことかと、今更に身の不覺を後悔した。

「ほ／＼、吃驚したかい、お前さんがあんまり強情を張るから、わたしの方でもつい小細工をして見なくなるのさ。」

と、女將は憎々しそふに言つた。美津助はもう觀念の眼を閉ぢて返事もしなかつた。餘計なことを心配するよりは、如何にして京坂の毒牙を逃れやうかと、その事が頭に働いてゐるのだ。

美津助は手と足とをしつかり縛られて、暗い一室に投げ込まれた、如何にも斯う

にも、もう身動きは出来なかつた。

人が住んでゐるのかゝないのか、家の中は森としてゐる、遠くの方で海の鳴る響きがする。庭の木立を渡る小鳥の聲は朗らかであつた。けれども美津助の心は暗く閉ぢられて居たのである。

此所へ捕はれてから、もう二日ばかり経つて終つた。女將は毎日のやうに顔を出しては、京坂に身を任せろといふ、然し、もしもの時には舌を噛み切つてでも死なうと、覺悟を決めてゐる美津助は、一言半句も答へなかつた、さつと口を結んだ儘、片言隻語も發しなかつた。

姉の果敢ない運命を思ひ、短かつた生涯を思ひ、母親を思ひ、平太郎を思ふとき、美津助はわが身を顧みて、餘りに拙ない母子姉妹の宿運に泣いた。思ひ疲れ、泣き疲れ、さうして二日の間飲まず食はずにゐた飢とで、思はず知らず、ついトロとしたと思うと、人の足音がして、又しても女將が顔を出した。

「どうだい、光ちゃん。」

六

「……………」

口は聞かなかつた。口惜しさうに落ち込んだ眸の底が光つた。

かきもあげず、束ねもあえない髪が、その蒼い顔にはら／＼とかうつて、肩に流れて灯影が亂れる、美津助の眼には涙がきら／＼と光つてゐた。

「お前さんも餘程強情だよ。」

と、言ひながら、女將はすか／＼と近寄つて、美津助のそばにべつたりと座つて、憎々しげに覗いた。

「本當にお前、よう／＼考へてごらんよ、お前の方で心中立しても、高柳さんの方ちや、もう心變りがしてゐるんだよ、青井さんとかいふ伯爵の令嬢と、御結婚なさる

「んだつて云ふ話ぢやないかね。」

「あの方が御結婚なすつたつて、わたしや構ひません。」

「構はないつて、お前、それぢや、一體誰に情を立てるんだい。」

「あの方が奥様を御迎へ遊ばしても、私は構ひません、わたしの心に思ふ良人はいつが何時まであの人一人、一生岡惚れで暮してもいいと思つたのに、たとへ一月でも、念が届いてお伽が出来ましたのですもの、私しやそれだけで満足してゐます。」

「恐ろしい惚れ様だね、だつてお前もう京坂の旦那が落籍して下すつたのだから、お前の身體は旦那の自由自在、無理にも旦那のいふことを聞かせられても仕方がないと思ふがね。」

「その時は死んでしまひます。」

「まあ……だつてそれで死ねますかね、手も足も自由は利かないんぢやないか。」

「舌をかみ切つて死にます、庭の敷石に頭を打つけて死にます。」

「お、恐い。」

と、女將は首を縮めて、

「舌を噛めば血がでるよ、頭を石で打てば粉々になりますよ。」

「なつても、女將さんの舌は借りません、女將さんの頭は借りません。」

「へん、いい覺悟だよ。」

と、忌々しさうに言つたが、

「だがねお前さん、今時お前位慾を知らない女も珍らしいね、一口ウンと言ひさへすれば、華族様の奥さまでさ、立派に暮して行けるのを、何が不足で舌を噛み切つて死ぬのだね。」

「わたしの心は女將さんにはお分りにはなりません。」

「わかつても仕方がないよ……大きな聲ぢや言へないが、京坂の旦那はもう六十、どうせ長いことは無いんだもの、随分氣儘も出来やうと思ふんだがね。」

「そんなこと、聞きたくはありません、身體はうつても心は賣りません、私の心は、百萬圓のお金を積んだつて、厭な人の自由にはなりません、たとへ殺されても、厭な人には何時までも厭つて言ふより他に仕方がありませんから、女将さん、もう私には何にも言はないで下さい。」

「まあ呆れた。」

と、女将は本當に呆れたらしく、仰山に目を丸くして見せた。

やゝあつて、

「だが、光ちゃん、如何しても承知は出来ないの、ウンと言はれないの。」

「仰有るまでもありません。」

「ちや仕方がないから覺悟をおしよ。」

「覺悟とは？」

「はゝゝゝ、希望の通り生命をとつてやるのさ。」

と、女将は背後を顧みた。

間の襖がさりとあいて、ぬつと顔を出した老紳士、京坂の姿を見ると、美津助の心は、覺悟の上とは言ひながら今更のごとく怖えるのであつた。

七

「どうした女将。」

と、言ひながら入つて來た。その顔に浮べてゐる微笑も、美津助にとつては恐ろしいものの一つであつた。

「どうしてもウンと言ひません、本當に此の子の強情にも呆れましたよ。」

「左様かな。」

「いよく、荒療治にかゝらなければ駄目ですよ、それでも光るのを見たら、ちつたあ吃驚するでせうか。」

「さうか。」

と、京坂は生返事をしながら、疑と美津助の様子を見守つてゐたが、やがて、つと立ち上つたかと思ふと、懐中から短刀を出した。

「美津助。」

と、鞘をはらつて、抜刀を美津助の目の前へ突きつけた。

「は。」

と、顔をあげた。

閃々光るのを鼻先へ突きつけられると、不思議と氣が落ちついて來た。ちつと其の白刃を見る眼に恐怖の色は無かつたのである。

「恐くはないか。」

「どうぞ、すつぱり切つて下さいまし、どうせ、此家へ來ました時から、生命は棄てやうと思つてゐました、今更恐いの何のと申上げた所で仕方がありません。」

「ウン、いい度胸だ。」

と、逆手に持ち直してブツリ。

「あッ。」

と、女將は恐ろしさうに突伏して終つた。

ブツリと音がしたのは、縛つて置いた美津助の繩を切つたのだ。美津助は呆れて其美くしい眼を瞻つた。

「美津助！」

と、京坂はそこへ坐つた。

繩を切つて、さうして何うする心組なのだらうと、美津助は、京坂の心の底が計りかねて、不安と危惧に満ちた眸を輝やかして、ちつと此の不思議な老紳士の振舞を見てゐた。心をきつと張つて少しも油断しなかつた。

「光子といつたか、わるい悪戯だと怨んでくれるな、おれが悪かつた、勘辨して呉

れ。」

「はう。」

と、見上げる。

「おれはお前の心を見ることが出来なかつた、お前の顔の美しいのを見て、心の底の清いの見貫なかつた、近頃年甲斐もないことだつたよ。」

「はあ。」

と、まだ不思議さう。

「お前の心の底を見抜いたからにや、もう誰が何といつても、おれが平太郎と夫婦にしてやる。」

「は、旦那様は？」

「おれは白井、高柳が眞實の叔父ぢや、京城などとは出駄羅目の名ぢや……お前の心を疑がつて試したといつたら腹が立つだらうが、ま、ま、この胡麻鹽頭に面し

て勘辨してくれ。」

「あの旦那様が……あの白井の御前……左様ですか、まあ……」

餘りの意外に、美津助もまあくそばかり、あとの言葉は次げなかつた。

「平太郎も明日は水戸をら歸るさうぢや、今晚にも、是から高輪へ行つてゐたら、

平太郎も吃驚するだらう、はうう。」

と、白井男爵は心持よげに言つて、惚々とその美しい顔に見入た。

「光ちゃん御目でたう。」

と、女將も始めて仔細が分ると莞爾笑つた。

「はうう。」

と、老男爵はまた哄笑した。

美津助は、この白井男爵の大森の別荘から、すぐに高輪の高柳邸へつれて行かれた、辰子未亡人は、老兄から美津助の心意氣を聞いて嬉し涙をこぼして喜んだ、そして思つたより美津助が美人なので、

「平太郎が何したのも無理はないね。」

と、そつと雪子にさゝやいた。

「おまけに、氣性がしつかりしてるんですもの。」

と、雪子も莞爾した。

三太夫も出て来て、前日の無禮を頻りと謝した。美津助はたゞもう嬉しさと晴が

まじさに胸がわく／＼するばかりだった。

* * * * *

そのあくる日、平太郎は東京へ歸つた、獲物が少なかつたので少からず不愉快で、また所へ、紅葉亭で美津助が誰かに落籍されたといふ話をきいたので、自棄酒をあほつて夜の十二時頃家へかへつた。

いつもは此の時間になると、大が門の扉を締め切つて終ふのだが、今晚は眞晝のやうにあげ拂つてある。マルは一足先に門内へ飛び込んで猛然として吠えた。マルが吠えたので、主人の歸宅を知つた人々は、女中も書生も、雪子も、みんな出迎

へた。

靴の紐が急に解けないので、やけに怒鳴ららしてゐると、母親の辰子と、美津助が出て来た。

「おやお歸りだつたね。」

「お歸り遊ばせ。」

と、美津助は羞恥かしそうに手をついた。

「あッ、お光か。」

と、平太郎は靴をはいた儘座敷へ上つた。

* * * * *

美津助と平太郎とは結婚の式を擧げて、帝國ホテルの披露宴へ顔を出すと直ぐ其の足で箱根へ旅行した。

種長は遂に淪落の男となつて新吉原の小川樓へ妓夫に住み込んだが、義侠な樓主の口聞きで幫間となり唐琴家愛娼と言つて鯉つかみの藝當が十八番で賣り出した。

また中旗は新劇團の俳優になつて帝劇の女優劇に出勤してゐるうち、淺草公園の藝者と戀仲になつて新世帯を持つた。

種長の演ずる鯉つかみの唄なるものを聞くと、

「花や戀しき唄の、さつと吹き来る春風に、かすみが生める初ざくら、花の色香につひ移り氣な、菜種は蝶の露の床。」

「わすれかねたる比翼の蝶の、情けくらべん仇ざくら、雪か雲かと峰の花、せめて薫りの便りもがなと、おもひくらしして糸柳。」

と、いふ長唄の「浦島」の一つを抜いたやつを端唄に牽強けて美津助と平太郎とを諷刺つたもので、それを市村座附の杵屋美太郎が譜を附け、浅草の花柳助次郎が装りを附けたのだが、吉原から公園へかけて流行り出した。

小説のし
●
び
胸
終

大正七年九月二日印刷
大正七年九月九日發行

【定価金五十錢】
（郵税金六錢）

著者 青木 綠園

發行者 東京市浅草區瓦町二十四番地
中村 惣次郎

印刷者 東京市神田區元久右衛門町三丁目番地
岩見 米三郎

不許複製
小説の胸
~~~~~  
説

發兌所

東京市浅草區瓦町二十四番地

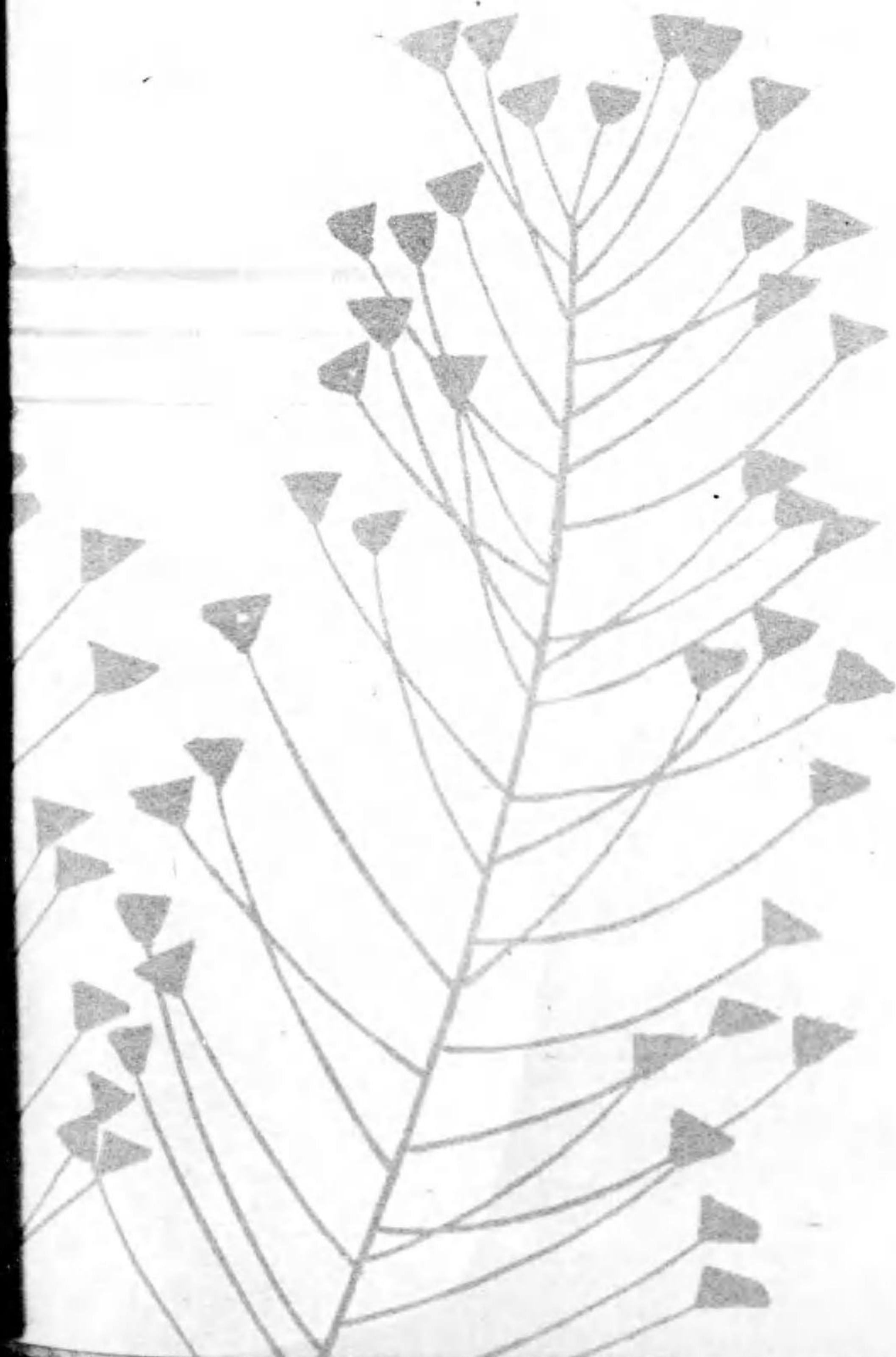
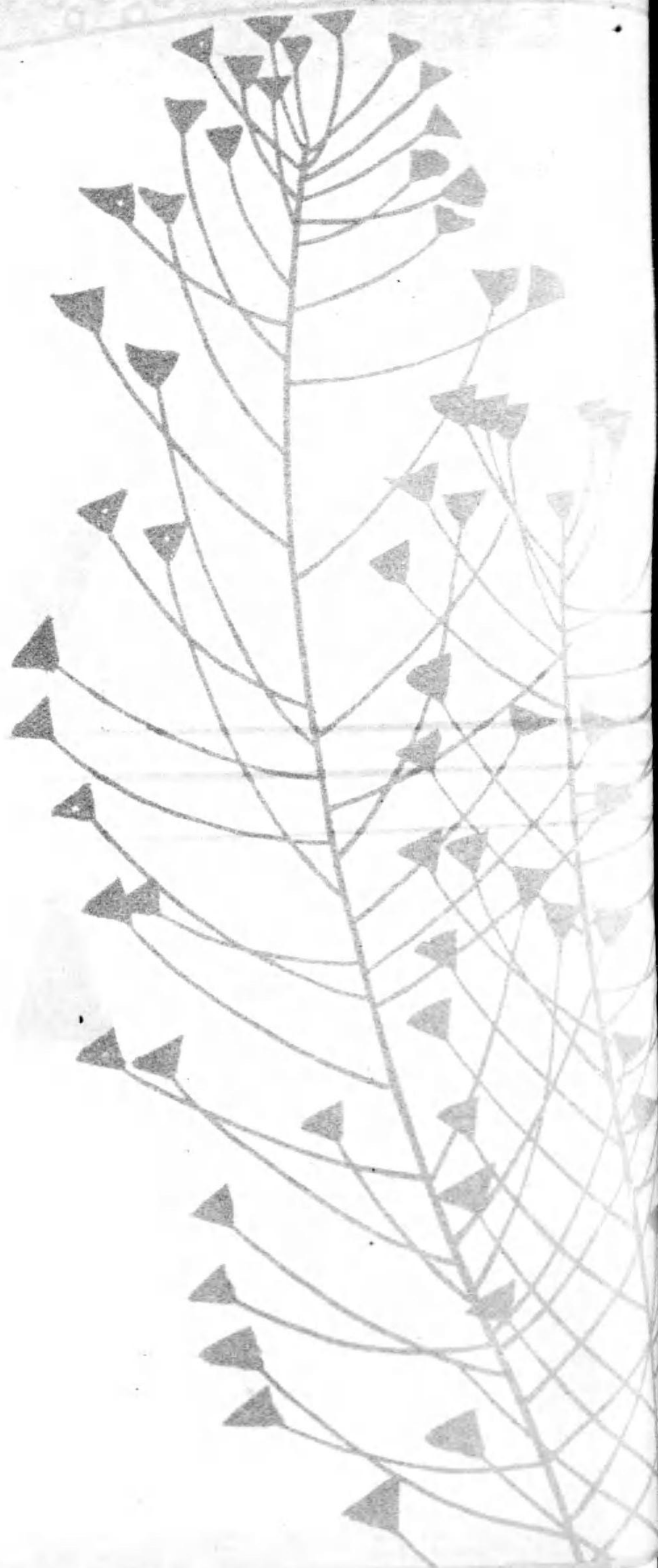
中村 日吉堂

電話下管九三一番  
郵便東京二六一六番





119  
612



清  
2002

終